

# 嵐山町の伝説

(嵐山町教育委員会編)

再版者 佐藤 治  
挿絵 澤村 厚夫

再版日 一九九八年 六月二五日  
改訂 一九九九年 十月一日  
改訂 二〇〇〇年 三月十日

# 嵐山町の伝説

(嵐山町教育委員会編)

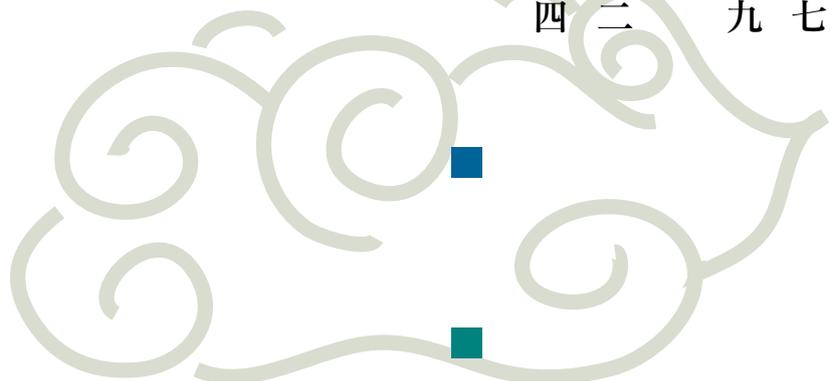
## 目次

協力者氏名	.....	三
一、 將軍沢のけつあぶり	.....	四
二、 大蔵の縁切り橋	.....	六
三、 血の出る榎	.....	七
四、 鎌形の首切り地蔵	.....	九
五、 千手堂の千手観音様	.....	十一
六、 水切り石	.....	十二
七、 大蔵のやかた	.....	十四
八、 おじようろう屋敷と女くぼ	.....	十五
九、 雹の降らない遠山	.....	十六
十、 鬼鎮様	.....	十八
十一、 木がかり薬師	.....	二十
十二、 大きな人(ダイダラボッチ)	.....	二十一
十三、 首なし地蔵	.....	二十二
十四、 手白様	.....	二十四
十五、 観音沢	.....	二十五

十六、	道立地蔵	二十七
十七、	相生の松	二十九
十八、	落栗庵元空網	三十
十九、	古里の一夜堤 <small>いちやどて</small> ・行灯堀 <small>あんどんぼり</small> の記	三十二
	この冊子について	三十四

協力者氏名  
(順不同敬称略)

根岸	福島新三郎 <small>ふくしましんざぶろう</small>
鎌形	小林儀作 <small>こばやしぎさく</small>
鎌形	簾藤惣次郎 <small>すとうそうじろう</small>
千手堂	浅見覚堂 <small>あさみかくどう</small>
川島	森田与資 <small>もりたよし</small>
杉山	金子長吉 <small>かねこちようきち</small>
杉山	金子慶助 <small>かねこけいすけ</small>
吉田	藤野豊吉 <small>ふじのとよきち</small>
吉田	坂本幸三郎 <small>さかもとこうざぶろう</small>
古里	安藤義雄 <small>あんどうよしお</small>
古里	安藤専一 <small>あんどうせんいち</small>



# 一、將軍沢のけつあぶり

今から一千年も前の話です。

天皇から「東国には悪い者がいて、住民が苦しんでいるそうだから助けてやりなさい」と、坂上田村麻呂に命令がありました。

坂上田村麻呂は、征夷大將軍という役目でたくさん侍を引き連れて、京都を出発し関東地方へ来ました。

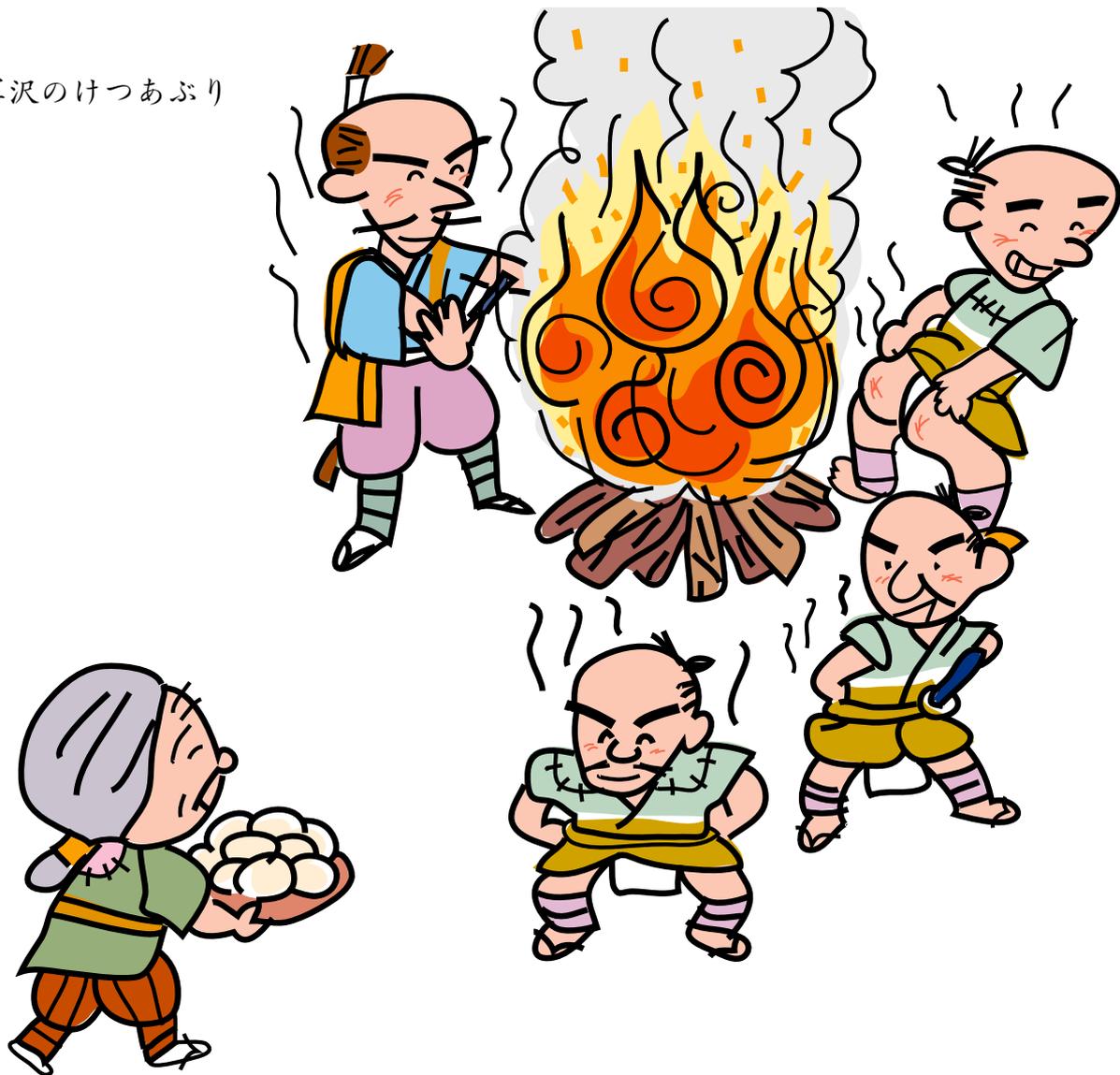
その時、「岩殿山に龍が住んでいて、悪いことばかりして困っている。」という話を聞きました。さあその龍を退治しようと、嵐山町へ、入って来ました。將軍沢へ軍を進めて、岩殿山の龍の調査をしました。けれども、なかなか龍がみつかりません。観音様をたのんで「どうぞお願いします。」と申しあげると、観音様は、「岩殿山は九十九谷ある。その中で雪の日には雪の積もらぬ谷がある。そこに龍が住んでいるから探さない。」と教えて下さいました。

昔の暦で五月の末。「雪の降るのは冬。困ったなあ。」と、田村將軍は考えたが、広い広い山中のこと仕方あるまいと待つことにした。ところ



一、將軍沢のけつあぶり

が不思議。夜になると雪が降って来た。十センチ、二十センチ、夜の明ける頃は、三十センチにもなりました。將軍は侍を連れて雪のない谷を探しました。あちらこちらを歩くう



ち、「あった、あった。」と一人が叫びました。「それっ」と、將軍と侍たちはその谷へ飛び込みました。龍は大きな口をあけて、みんなを呑みこもうとするが、こちらは鍛えに鍛えた腕、刀であちらこちらを切られた龍はとてまかなわぬと逃げ出しました。侍たちは追いに追い、とうとう山の途中の坂道で切り殺してしまいました。そこを『蛇坂』といいます。

龍を退治した將軍と侍たちは、將軍沢の陣地へ帰ります。途中、山中の一軒の家から、おばあさんが出て来て、「さあお寒いでしょう。ひと休みしてください。」と庭へ麦わらを積んで火をつけました。「將軍様も、どうぞあたってください。」と頭を下げた。雪で、着物がビショビショ、寒さもひどい、みんな喜んで火を囲んだ。そのうちおばあさんは、おうちからまんじゅうを持って来てみなさんにあげた。前の方が乾くと、今度はお尻の方を乾かした。尻あぶりだ、この朝が六月一日でした。

嵐山町では、六月一日になるとこの家でも庭か、かいとで麦わらを炊き、みんながお尻をあぶりました。これを『けつあぶり』といい、その時お母さんがおまんじゅうを持って来てくれます。「けつあぶり」をし、まんじゅうを食べると、身体は健康で、体力もつくといわれます。この習慣は、埼玉県中どこでも行われていたようだが、昭和の初め頃から次第に行われなくなりました。

龍を退治した將軍は、侍を引き連れて東の方へ出かけ、東北地方まで行ったそうです。

## 二、大蔵の縁切り橋

大蔵から將軍沢へ行く途中、右手に田が二、三枚その先が不動坂です。田から流れ出す堀に橋が架けてありました。これが『縁切り橋』です。

不動坂を登り切ると左手に日吉神社の鳥居が見えます。前に『けつあぶり』の話を書きましたが、坂上田村麻呂が軍勢を引き連れて滞在し悪龍退治のため様々の工夫をし、夜を日に次いで準備にとても忙しかった時です。將軍の奥方が心配のあまり、京都から旅を重ねてここまで来ました。奥方の姿を見た家来は、日吉神社の裏山で待っていただいて將軍のところへとんで行ってお話ししました。

「天皇の命令で、征夷大將軍としてこの地に来ている私に、妻が訪ねて来るとは何事だ、会わぬぞ。」と大声でどなりました。そして將軍は立ち上がり、杉の木の生い茂る森の方へ歩いて行きました。

將軍の声を聞いた奥方は、お付きの人の止めるのを振り切って、將軍の方へかけて行きました。將軍の側までかけた奥方は「將軍様。」と声をかけたが將軍は何とも言わずそのまま森の中へ入ってしまいました。そこで人々は奥方の待っていたところを『逢はずが原』と言い、森でもお話が出来なかつたので『添わずが森』と言うようになりました。



橋切り縁の蔵の  
榎の出る血

二、  
三、

## 三、血の出る榎

さて翌日、將軍は家来に命じて奥方に京都へ帰るよう出立させました。

奥方が心残して帰るのを將軍は不動坂の下まで来て「大命を受けて出陣しているのに、それを追い来るとは何事だ、ただ今より妻ではない、夫ではない、早々立ち去るがよい。」と、夫婦の縁を切る宣言をしました。泣き崩れる奥方、立ち去る將軍、そしてこの橋を『縁切り橋』と言うようになりました。

縁切り橋は縁起が悪いと婚礼の時にはそこを通らぬようにという習慣が將軍沢に生れたので、みんながそれを守って、

今から二百五十年も昔の話です。槻川橋を渡った右の集落は落合というところ、その名主は万右衛門さんという人です。ある夏の日のこと、大きなお家を開放して裏の槻川の方から吹いて来る涼しい風を、座敷の中へいっぱいに入れていました。家の人は皆用事があって出かけ、お手伝いのねえさんが一人留守居をしていると、突然、裏口からおそろしい物音がして、木の枕のようなものが家の中へ転がり込んでき

婚礼の時には別の道を通っていたのでした。ところがある家の結婚式で「そんな迷信を守らなくとも。」と、嫁さんを通すことにしたのです。縁切り橋を渡り不動坂の途中まで来た時、静かに歩いていた嫁さんが突然転びそうになり、袖が道に伸びていた松の枝にかかり、嫁さんも無事に婿家に着けたというお話です。その後、嫁さんを助けてくれた松を『袖掛けの松』と呼ぶようになり、五本が長い間あったが今は枯れてしまった。近頃の嫁入りは、自動車が多いので、この橋もなくなったが、みんな通るようになりました。

ました。お手伝いさんはおそろしかったが、そおつとのぞいてみると座敷に止まっていました。そのうちまた音を立てて転げ出し、前庭へ飛び出し大きな榎の木にある穴の中へ入ってしまいました。

そのうち、家の人が帰って来たり、主人の万右衛門も帰りました。お手伝いさんは、昼間の出来事をみんなに話しました。それではとみんなで榎の木の穴を探してみたが何も変



わった事はありませんでした。  
それから何年かたって万右衛門さん  
の家では庭の榎の木を伐ることになり  
ました。木こりが来て、鋸のこぎりで切りはじ  
めました。すると、まっ赤な血が木か  
ら流れ出してその辺を赤い水がドクド  
ク流れるようになってしまいました。  
みんなが驚いて、この木を切るのを止  
めてしまいました。  
今はその榎の木はありません。いつ  
か枯れてしまったのでしょうか。



て来ました。違う家来が刀を抜いて、おじいさんを切っ  
てしまい、殿様たちは仕置場をようよう抜け出し雨の  
中を帰って行きました。

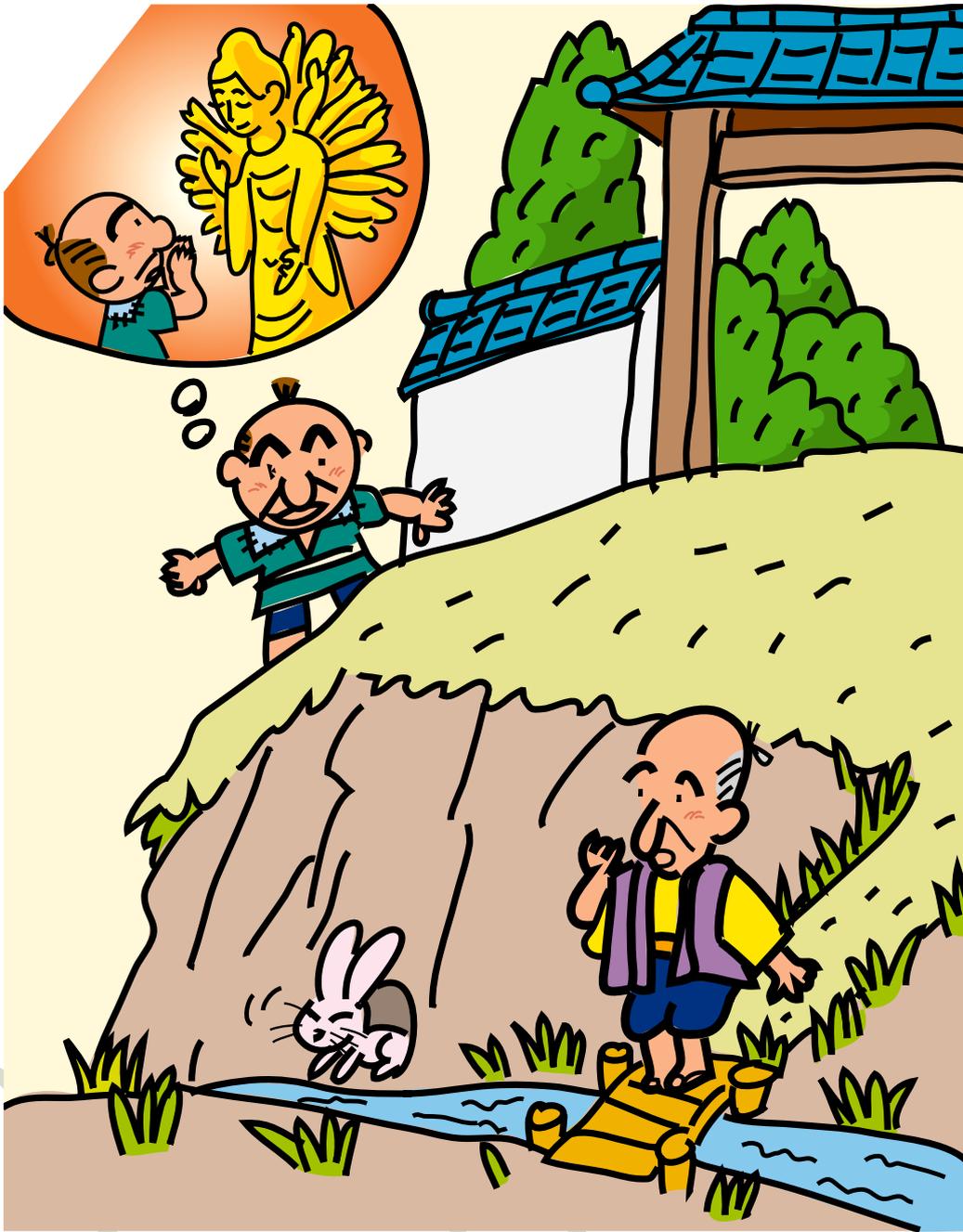
村の人たちは、名主さんが仕置をされたというので、  
大急ぎで集まりました。雨も止んで仕置場にお日様が  
照っています。名主さんの姿が見えません。「名主さ  
あーん。」と、大きな声でみんなが呼びました。する  
と槻川の方から「おーい。」と返事がありました。声  
のする方へ行ったら、おじいさんは手をしばられて、  
河原の石に腰かけていました。みんなが飛んで行って  
名主さんを助けました。

おじいさんをお家へ送り、みんなが仕置場へ来て落  
ち着いてその辺を見たら、地蔵さんが首を切られて倒  
れていました。

槻川橋を渡り、右へ入ると、けやきの木があつてそ  
の下に首に傷のある地蔵さんが立っています。その左  
の桑畑が仕置場です。



- 四、鎌形の首切り地蔵
- 五、千手堂の千手観音様



# 五、千手堂の千手観音様

せんじゅどう

せんじゅかんのんさま

千手堂に、千手院というお寺があり、本尊様は千手観音様です。

この千手院の入り口、お寺の庭へ入ろうとする手前の左の山へ少し登ると、直径一メートル位の穴があります。間違って石など落とすと、カランコロン、カランコロンと音がします。静かに聞いていると、だんだん微かにはなるが、しばらく聞こえます。深い深い穴なんでしょう。誰も入ったことはありません。

ある時、山のふもとのおじいさんがこの穴のそばへ行きました。山には兎がたくさんいましたが一匹がおじいさんをこわがって穴

の中へ飛び込んでしまいました。おじいさんは、心配しましたがどうにもなりません。観音様へ兔を助けてくださいと祈りました。

槻川橋へ行く右手に、前町長の関根茂章もしやうさんの家が見えます。昔名主様だったお家ですが、前のがけ下の川の端に穴があります。だれもこの穴へ入った者はありません。名主さんが穴のところへ下りた時、兔が一匹出て来ました。ちょう

## 六、水切り石

観音様が本尊様と祭られる千手院、昔は大きな寺で裏の山にもお堂が、あちらこちらにあったそうです。その頃の屋根瓦が山の中から今でも見つけられるそうです。比丘尼堂びくにだうといって女のお坊さんのお堂もありました。その比丘尼堂がある時火事になりました。一人の比丘尼はどうした事か、その火事場から逃げ出して山の中を、がらがら走ります。そして槻川の中へ飛び込みました。寒い冬の川です。かわいそうに比丘尼さんは、とうとう死んでしまいました。

夏になりました。元気な子どもたちが水あびをします。水はともきれいで魚の泳ぐのも見えます。もぐったり、川

どそこへ、さっきのおじいさんも来ました。「あっ助かった、助かった。」とおじいさんは大きな声で叫びました。名主さんは、おじいさんに訳を聞きました。観音様の山の穴から飛び込んだ兔ということがわかりました。それから後、名主様の前の穴が、千手院の穴まで続いているのだという事をみんなが言うようになりました。

の端の石の穴へ魚を追い込んでつかまえたりして遊んでいました。ところが一人の子が「あそこに光るものがあるよ。」と、みんなに話しました。水くぐりの上手な子が「ようし、おれがとってくる。」とくぐっていききました。みんなが目をおかして待っていました。「あつたぞ。」と大きな声がしました。みんなが待っているところへ抱え上げたのをみると金びかの観音様でした。

「名主様に見せた方がいいぞ。」「そうだそうだ。」と言いな

がらみんなで観音様を抱えて名主様の家へ行きました。名主様は、きれいな石を縁台に載せ、その上に観音様を載

五、千手堂の千手観音様

六、水切り石



せました。「これは千手院の観音様だ。水切れが出来たら早速お届けしよう。」と、言いました。

その台にした石を『水切り石』と名をつけました。観音様のあがったところは『観音淵』と名がつき、『水切り石』は関根茂章さんの家に大切に保存されています。

千手観音様を祭るこの村は、千手堂と言い、千本の手を持つ観音様が皆さんを守ってくれているのでしよう。

# 七、大蔵のやかた

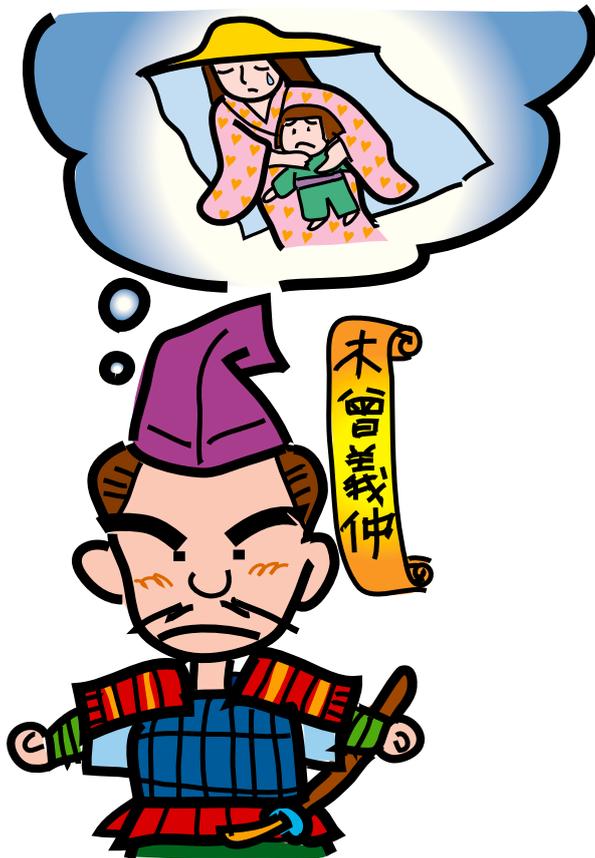
大蔵の神社のあるところ、その近所に大蔵の館やかたがあります。東西一七〇メートル南北二〇〇メートル位の広さを持っています。

今から八三〇年くらい前、源義賢みなもとのよしかたが、ここに館を構え、自分の勢力の拡大を計りました。もとは京都で近衛院の春宮とうぐう帯刀の長という役につき、帯刀先生源義賢といつて、立派な侍でありました。勢力を張り一方の大将となるには京都にだけいたのではだめだと考え、父為義ためよしの領土だった上野国多胡たご（群馬県多野郡吉井町）へ来た。そして大蔵の地が、武蔵武士として発展するのによいと考えると考え館を構えて勢力発展に努めた。

同じ頃、武蔵で大いに発展しようとした義賢の兄の子、源義平（悪源太）が父義朝と相談して、軍勢を引き連れ攻撃し、久寿二年義賢を討ち滅ぼしてしまいました。新藤貴司たかしさんのお家のわきの墓が義賢の墓です。

その時、義賢には二才になる駒王丸というかわいい男の子がいたのですが、大蔵館が討たれるという報に、母は駒王丸をつれてお家を逃げ出しました。そして山の中をあちらこちら逃げ歩いたのですが、ご飯が食べられずお乳も出ず、駒王丸が泣き止まないでどうどう敵に見つかってしまい

ました。その時の敵方の大将は畠山重能という人で重忠のお父さんです。悪源太義平から「見つけ次第殺せ。」との命令ですが、かわいそうでもとも殺せません。ちょうどその時、妻沼の斉藤実盛が来たので、駒王丸の乳母だった木曾かねとうの中原なかはら兼遠かねとの奥様のところへ預けることにしました。これが後の木曾義仲という侍大将になりました。



七、大蔵のやかた

八、おじょうろう屋敷と女くぼ

# 八、おじょうろう屋敷と女くぼ



今から八百余年の昔、大蔵の館に源義賢が住んでいました。夫人は当時藤原氏の全盛時代で義賢は帯刀先生といわれた武人として認められた人だったので、藤原氏のお姫様でした。

下克上げくじょうといわれる時代で、自分の出世のためには上司でも今仕えている殿様でも、はなはだしいのは親でも兄弟でも討ち負かして、自分が天下をとるといふ世の中だったから義賢は、いつ大蔵館が攻撃されるかわからないので、風光明媚ふうこうめいびな嵐山溪谷の地に別荘を造り、夫人をそこに住まわせました。これをお上臈屋敷じょうろうやしきと言いました。

久安二年（一一四六）この別荘で義賢夫人は、吉光御前を産んだのでした。昭和四十八年が親鸞生誕八百年の年だったが、この吉光御前は親

鸞上人の母親で、何時の時か京都へ移り住むようになったのでしょうか。義賢は大蔵に館はあったが常に上野、武蔵を歩き自分の武威を高めたが、京都へも折々上り藤原氏の高貴な人々を、おじょうろう屋敷へ招いて接待をされたようです。

おじょうろう屋敷の南に『女くぼ』というところがあります。これは、女公方おんなくぼうで、女の方で宮中に仕える豪族の奥方や貴人たちの宿舎や邸宅を意味するものでしょう。京都とこちらを往復するうちに、武蔵や上野に住みついた人もあったでしょう。今、藤原氏の家紋だろうといわれる藤の紋がこの付

近に多いのも考えさせられます。

おじょうろう屋敷の裏といわれる槻川の川原の、『きつこう岩』『きつこう淵』といわれるところは、吉光御前が子どもの時に遊んだ岩、水あびした淵を、当時ここに住んだ人々が名づけたものでしょう。

今は交通の便のよいところに住む人が多いので住宅がこの辺に少ないが、今、月川つきがわ荘の店のある近所には縄文時代の人々の住んだと思われる土器の破片がとて多く出ていることからかなり昔から人が住んでいたことがうなずけます。

## 九、電ひょうの降らない遠山

嵐山溪谷を、川に添って上って行くと遠山という村に出ます。周りを山に囲まれた盆地で北側の小高い所に遠山寺というお寺があります。江戸町奉行の遠山の金さんの先祖のお寺だそうです。今日は別のお話をします。

遠山寺に向かって左に裏山から続いてなだらかな山があります。草むした道をたどって山へ登ると古いお墓があります。

竜體院天導自証大姉

久屋導昌大姉

の二つの字が刻まれている墓です。女の人の墓ですが、そのお話の前にこの寺を造った人の話をしましょう。

田口隼人というお侍で北条氏の家来だったが、戦争ばかりしている世の中がいやになって頭の毛を剃ってお坊さんになりました。名は漱恕そせんぼ全芳和尚といひ遠山へ来て遠山寺を造

りました。

全芳和尚の兄さんは、群馬県きべの木部きべというところの殿様で、榛名湖という湖がとてもきれいなので、時々遊びに行き時には舟に乗って一日過ごすこともありました。ある時、この殿様の奥方が、お側付きの女たちと舟遊びを楽しんでおりましたら、舟が急に止まり周りに渦巻きができ水の中から何か出て来そうです。奥方は、こんな時、持ち物を投げると「好きな人の持っている物をくわえるものだ。」という事がある本で読んだことがありましたので、早速、頭に刺していた櫛を渦巻きの真ん中へ投げ込みました。櫛が水の中へ入ったかと思うと、大きな龍の頭が櫛をくわえて、ぬつくと現われました。龍が怒ったのです。そのままだと舟をひっくりかえされて乗っている全部の人が龍に吞まれてしまいます。奥方は「皆を助けるために私が龍のそばへ行くから、早く舟を岸へ戻しなさい。」と言ったかと思うと龍の方へ身を投げました。奥方にしじゅう付き添っている一人の娘さんが、「私も。」と大きな声を出したと思ったら湖へ飛び込みました。龍は二人をくわえて湖の底へ沈んでいきました。

木部の殿様から全芳和尚に使いが来ました。和尚さんは早速、榛名湖へ走って行きました。湖へ着いた和尚さんは一生懸命おがみました。龍は出て来たが奥方と娘は返してくれませんが。そのかわり和尚さんは、龍と約束をしました。どんなに激しい雷が鳴っても電を絶対に降らせないようにするという約束です。

和尚さんは遠山へ帰ってきました。そして奥方の墓とお側

付きの娘さんの墓をつくりました。それから、この遠山へは、電が降った事がないというお話です。



# 十、鬼鎮様きちん

昔々のお話です。

川島に、刀を造る鍛冶屋さんが住んでおりました。朝から晩までトンテンカン、トンテンカンと刀を造っていました。とても立派な刀が出来るので、評判がよくなり大勢の侍たちが買いに来るようになりました。

ある日、若い男がやって来ました。「僕、刀が造りたいのです。教えてください。」と鍛冶屋さんに頼みました。鍛冶屋さんも弟子を持ちたいと思っていた時ですから「よしよし。」と承知しました。

若い男はとても熱心で、休み時間も休まずに、夜も遅くまで一生懸命、刀造りをするのでよい刀が出来るようになりました。何年か過ぎた時は、もう立



派な刀鍛冶になりました。

この鍛冶屋のお家には、美しい女の子がおりました。だんだん大きくなって立派な娘さんになりました。若い男は、鍛冶屋の主人にその娘さんを僕のお嫁さんにくださいと頼みました。主人は少し考えて「それでは、ひと晩に刀を百本造つたらあげよう。」と言いました。若い男は喜んで、いろいろ準備して約束の日を待ちました。

約束の夜になりました。トンテンカン、トンテンカンと刀を造る音が休みなしに響いてきます。みるみるうちに、三本、五本と出来ていきます。夜も遅くなりました。主人は心配してそつと鍛冶場をのぞきました。出来ました、出来ました、出来たばかりの刀が山のように積まれていました。けれども驚いたことには、刀を造っている若い男はいつもの男ではありません。まるで鬼です。トンテンカン、トンテンカンと打つ槌も火を散らしてその辺は火の海です。するどい眼、頭には角まで生えております。何本かの手は次々に出来た刀を積んでいきます。主人は「アッ」と飛び出しました。そして、あの男にかわいい娘をくれられない、それには、にわとりを鳴かせて早く夜が明けなくてはと考えて、大急ぎで鳥小屋へ走りました。「ココケッコ」にわとりが鳴きました。

主人は、またのぞきに行きました。鬼になった男は、まだまだ刀を造っています。けれどそのうちに東の空が明るくなつて夜が明けてきました。

刀は九十九本出来ていました。鬼の男は、槌つちを握つたまま

倒れています。側へ寄つて見ると死んでいました。主人は涙がとめどもなく流れてきました。亡くなった男を抱きあげて外へ出しました。そして庭の隅へ埋めて、『鬼鎮様』というお宮を造りました。

それから、長い年月がたちました。菅谷村へ畠山重忠の館が建ちました。そしてこの川島の地が鬼門にあたるということで、信心深い重忠は、鬼鎮神社という立派なお宮を造り、今、日本にただ一つの鬼鎮様として各地から参拝する人が絶えない状況です。

# 十一、木がかり薬師

川島に花見堂という堂があります。薬師様が本尊様でしたが、昔々のお堂ですから大分傷んで今にも潰れそうです。目の病気の時、南無薬師様とおいのりすると、たちまちなおるというお話です。

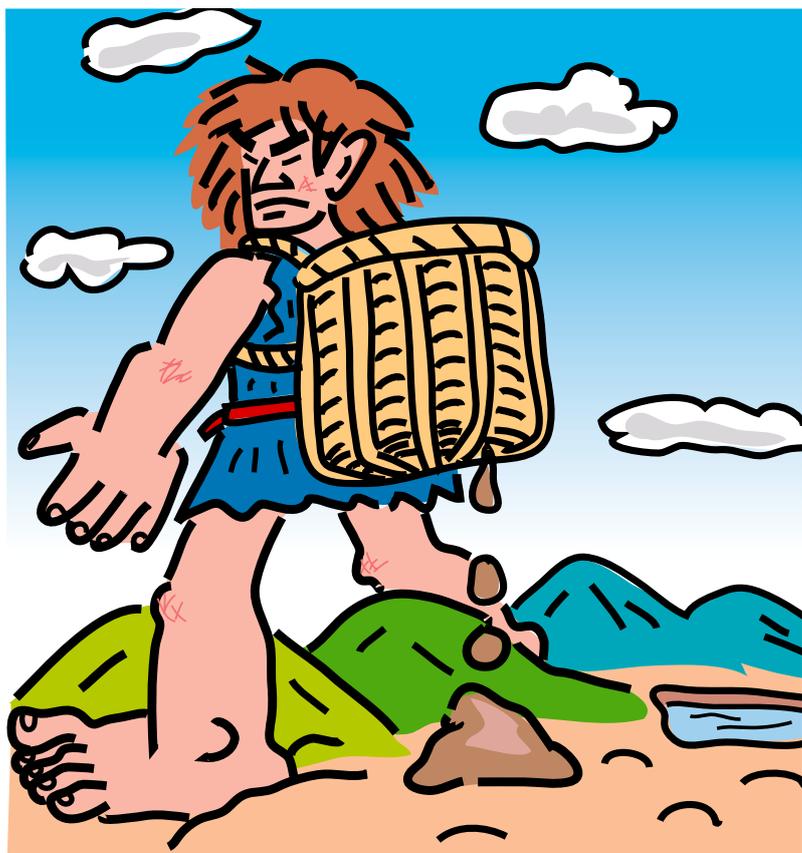
今から三百年も前の古いお話が伝わっています。太郎兵衛さんが朝早く川の端を通ると、「太郎兵衛……太郎兵衛。」と呼ぶ声がします。太郎兵衛さんは、あたりを見まわしたけれどおりません。おかしいことがあるなあと思いながら歩き出すとまた「太郎兵衛……太郎兵衛。」と声がかかります。太郎兵衛さんは今度は声のする方角がわかったので上の方を見ました。その時、赤い朝日が、サツと目の前の木を照らしました。太郎兵衛さんは木の枝に金色に輝く薬師様を見ました。「ああッ薬師様だ！」と驚きの声をあげ木の枝にひっかかっている薬師様を大事にはずし抱きかかえてお家へ帰りました。お座敷に飾って「薬師様大変だったね。」と言って、お線香をあげました。

それからの太郎兵衛さんは、朝早くから夜遅くまで一生懸命働いて、お金をため薬師様のお堂を造りました。太郎兵衛さんは、この薬師様を毎日おがみしました。近所の人々もいろいろ供え物をして薬師様をおがみしました。木にかかっていた



ので『木がかり薬師』と皆が言うようになりましたが、どうした事か今では『きかず薬師』と言います。太郎兵衛さんが薬師様を見つけたのが、九月三十日です。この日を縁日と決め長くお祭りをしていました。なお、太郎兵衛さんが薬師様を見つけたところを『古い薬師』と言います。

- 十一、木がかり薬師
- 十二、大きな人（ダイダラボッチ）



## 十二、大きな人（ダイダラボッチ）

昔、大きな人がいました。背が高く、足などとても大きくて十軒や二十軒の家を踏み潰すのは何とも思わぬというほどです。この大きな人が嵐山町へ来ました。

広野ひろのにダイダン坊というところがあります。羽尾はねおに片足があつて、広野へ片足をつきました。籠を背負っていたのですが、間違つて籠のメドからどろを一つ落としてしまいました。

そのどろは、今の太郎丸の御堂山みどうやまですが、昔は籠のメドから落ちたからと『メド山』と言いました。

広野では『ダイダン坊堰』せきと言っていますが、この付近が中心で、その区域は約三ヘクターといわれます。

この大きな人は、広野の次は小川町の高見の四つ山の下を踏んで、玉淀の水で手を洗ったという話ですが、高見ではその足あとを『あしっこ沼』と言っています。

この巨人の話は、各地にあります。普通『ダイダラボッチ（だいだら法師）』と言われていますが、簡単に二、三書いてみます。

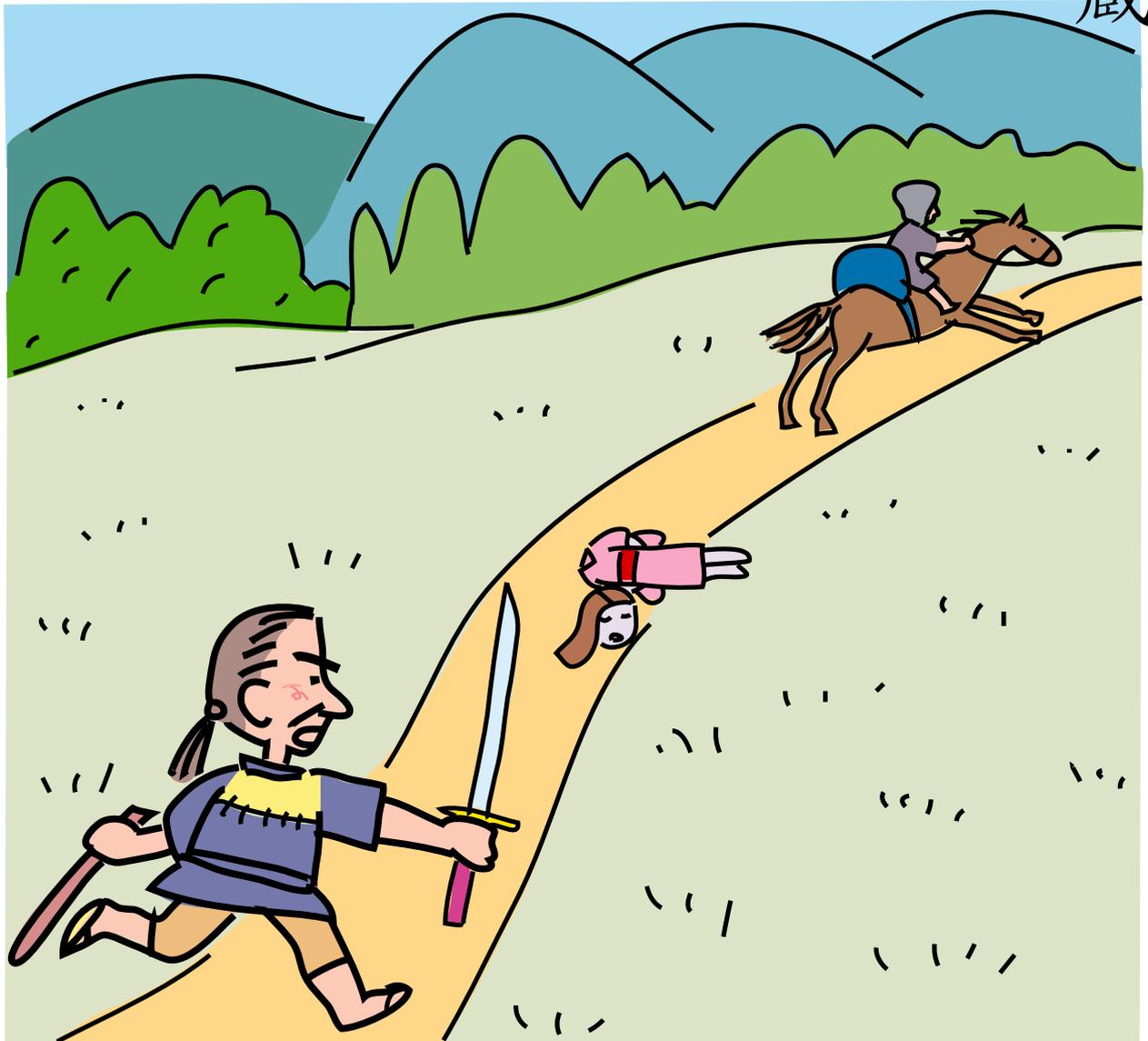
天びん棒で山をかついで来たダイダラボッチが、どこへ置こうかなと眺めているうち、足を滑らして山を落してしまいました。その足をついたところが、『あしがくぼ』で、その落ちた山が『二子山』だということです。（秩父の方にあります。）

ダイダラボッチが、ひと休みして笠をとって置いたのが『笠山』かさやまで、みのを脱いで置いたのが『美の山』、おなががすいたので粥かゆを煮たのが『粥煮峠』かゆに、荒川で釜かまを洗って伏せたのが『釜伏峠』かまふせという話を聞いたら、どんなに大きな人か考えられそうですね。

# 十三、首なし地蔵

昔、小川町から熊谷へ行く道が、杉山を通っていました。中爪なかつめから六万坂ろくまんざかを登り、おきやつへ出て広野へ行く道です。六万坂を登ったところに金子屋という団子屋がありました。車のない時代ですから重い荷物は馬の背につけて運び、人は歩いて行きます。のどが乾きおなかがすけば、お店へ寄ってお茶を飲んだり、団子だのお菓子を食べ、馬には水を飲ませてまた歩きます。金子屋さんにも通る人が寄っては休み、また出かけます。この家には、きれいな娘さんがいました。みんなに親切にしてあげるので、お店にいつもお客さんがいっぱいいます。

ある晩、この団子屋さんにとろぼろが入りました。家の中にあるお金になりそうなものを盗んで馬の背に



つけました。そして最後に、娘さんをつかまえて手足をしばり、声が出ないように口までしばって馬の背にほうりあげて団子屋を出ました。

娘さんは馬の背で苦しいから首を動かし動かしすると、口をしばった手ぬぐいがポロリと落ちました。そこは多右衛門おじさんのお家のそばだったのです。「多右衛門おじさん助けて！助けて！」と大声をあげました。多右衛門おじさんは、若い時はお侍だったのですが、お城が敵にとられた時、侍をやめて杉山へ来て百姓を始めたのでした。団子屋の娘がよい子なのでおじさんはかわいがっていたのでした。「助けて！」の声を聞いて早速刀を持って外へ飛び出しました。その時、刀を抜く音がしたかと思ったら「ワアッ」という娘の声が出て、馬は駆け出したようです。どろぼうが娘を殺し、馬を駆けさせて逃げたらしい。

多右衛門さんは「しまった。」と言ったが、もう遅かった。提灯ちようちんをつけて探したら娘の首と胴は別々になつて死んでいました。かわいそうに思った多右衛門さんは、石屋を頼んで娘の顔そっくりなお地藏さんを作ってもらいました。そして娘さんの亡くなった日が二十四日だったので、毎月その日にはお花や菓子や線香をあげました。

ところが、ある夜このお地藏さんの首をだれかがとってしまいました。おじさんがいくら探しても見つかりません。そこで石屋さんに首だけ作ってもらい地藏さんに付けましたけれどまた首がなくなりました。多右衛門おじさんが幾度も

幾度も、首を作ってもらってもだめでした。

おじさんも年をとって亡くなり、首のない地藏さんということで今も『首なし地蔵』と言っています。

この『首なし地蔵』は、娘の殺されたところにまつられたのでしたが、後に積善寺しやくぜんじへ移され今は寺の入口の松の木の下に、首のないまま、まつられています。おいでの節は、道ばたの花でもあげてください。



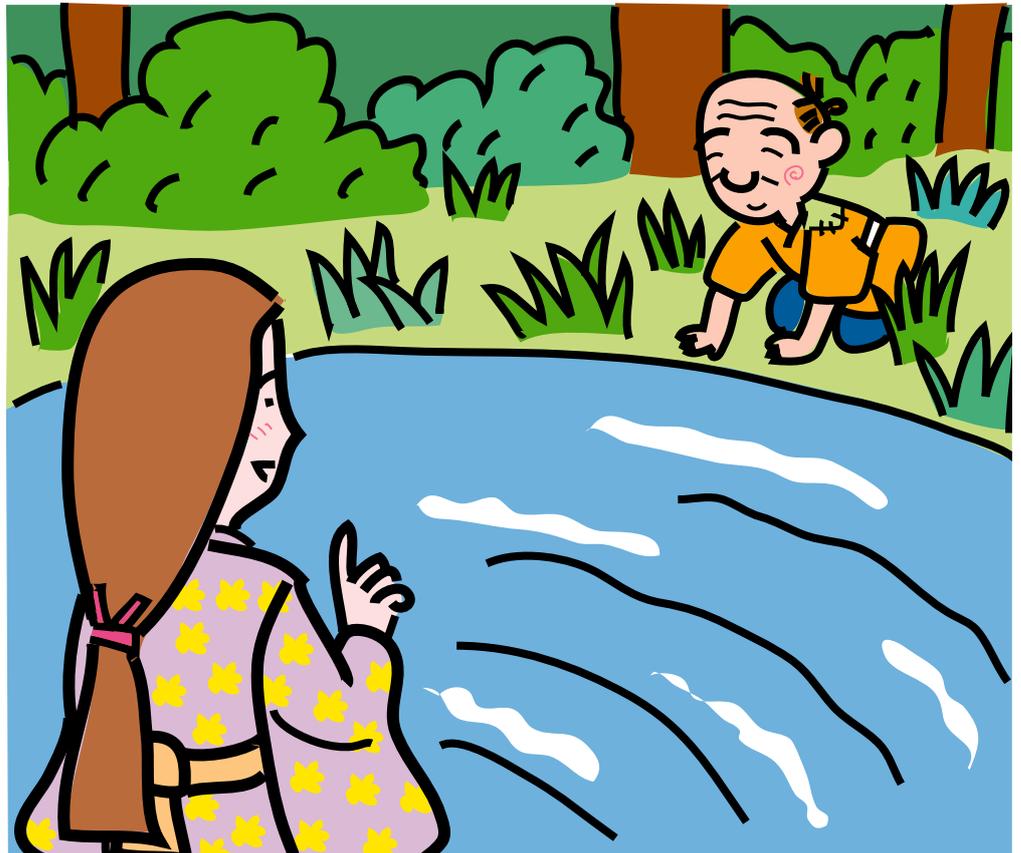
# 十四、手白様

手白神社というよりも、手白様といった方が、何か懐かしみを感じるのでこの題にいたしました。

緑の若葉が、お天道様に照らされてとてもきれいな朝でした。吉田の村のおじいさんは、よいおじいさんでした。皆の困らないように、いろいろな心配してくれます。道が悪ければ直し、お米がなければ、お家を持っていきます。困った時、おじいさんに頼めば、何でも親切にしてくれます。

ある朝早く、おじいさんは大きな沼の土手へ行きました。すると沼の中から白い手が出て、『おいでおいで』をします。おじいさんがその方へ行くと、水の中からよいかおりがして静かな音楽がきこえてきます。だんだん近付くと水の中から美しい女の神様が、『サアツ』と立ちあがりました。

「お前は、毎日毎日皆のためによく親切をつくしてよい人だ。私は、手白香姫の命、手の病や、手の業（裁縫、手芸、料理等）で困ったら私を信心しなさい。必ずよいように計ろう。」と言われた。おじいさんは、ありがとうございますと頭をさげて拝んだ。やがて頭をあげた時、手白香姫の姿は消えてきれいにすんだ沼の水に朝日がさしていました。



おじいさんは、大急ぎで家に帰り大工さんをたのんでお宮を建てた。これが手白神社で、おじいさんが手白香姫命を拝んだところを『弁天』といいます。

以上は、古い手白神社の縁起であるが、今は次のように語られています。略記してみます。

人皇<sup>じんろう</sup>二十四代、仁賢天皇は政治に熱心で日夜、その事に専念していた。皇女手白香姫は国民に困る人ができはしないかと心配し都<sup>みやこ</sup>を出て全国を調べる旅に出た。偶々<sup>たまたま</sup>吉田の地においてになり、沼の土手で休まれた。その時、大事な鏡を出して身なりを整え<sup>ととの</sup>ようとして誤って鏡を沼の中へ落としてしまった。いくら探しても見つからなかった。そこへ通りかかった村人が、皆を呼び集めて沼の中を探したが、ついに発見出来なかった。その時、手白香姫は、皆のご苦

勞を謝し、重ねて

「私は仁賢天皇の皇女、手白香姫、鏡は女の魂である。今ここに落ち、見つける事の出来ないのは、私の魂がこの地に住みつきたいのであろう。然し<sup>しか</sup>私は今、全国をまわり国民の生活を見て歩かねばならぬ。この鏡を私として守ってください」  
と言い残してお出かけになられた。手白香姫は、第二十六代継体天皇の皇后となられたお方で、吉田の人々は、沼のほとりに宮居を建て、手白香姫命の御徳をたたえている、と記されている。

## 十五、観音沢

旧吉田小学校の前に観音沢というところがあります。昔、天から白い雲に乗られた観音様が降りて来られました。この地の人たちがみんな集まり、観音様をおがみました。

音様が降りられました。

皆がその山へ登り観音様をおがみ「どうして観音様は、こちらへお移りになったのですか。」と聞きました。

ある日、信者の一人がおまいりに行くと、天から白い雲が降りて来て観音様はその雲へ乗られて、空へあがられて南の方へ進まれました。早速、その後を走りました。「何だ何だ。」と皆が後を追いました。と、ある高い山の上に観

観音様は、「私はできるだけ多くの人を助けたい。救いたい。それには広いところがほしい。吉田で皆の信仰を得たから今度はこの岩殿で私の仕事をしたいのだ。吉田は九十九谷だが、こちらは百五十もの谷があつて大勢の人が住んでい

る。信心の心が起こったら、『南無観世音菩薩』と呼んでく  
ださい。すぐとんで行きますよ。」とおっしゃいました。

皆は観音様へ頭をさげました。暖かい春の陽ざしが、観音  
様と皆をつつんでいました。



# 十六、道立地蔵

みちだて

植木山の西の方、中島との境を流れる妻の川、そこに架かっている橋を木曾殿橋、また、その近所を妻の沢といいます。南を向くと小高い丘がありますが、そこに石造の地蔵さんが見えます。これが道立地蔵です。

ミチさんは、かわいい女の子でした。家の手伝はよくするし、皆にも親切でいつもほめられる子でした。大きくなつて大工の棟梁さんのお嫁さんになりました。棟梁とうりょうというとお金などを二十人も三十人も使つてお家を造るので、お金などいくらもあるし、食べ物など困ることはありません。お家の仕事もお手伝いさんがやってくれるし、よい着物もいっぱいあるし、とてもしあわせでした。

何年かたった頃、どうした事か棟梁の源造さんが仕事もしなくなり毎日酒ばかり飲んでいたので、大工さんもだんだん減つて、ミチさんが三人目の赤ちゃんを産む頃には、だれもいなくなりました。そして源造さんは、家の前の最後の畑を売ることにしてお金を借り、どこかへ行つてしまいました。

ミチさんは、赤ん坊をおんぶして近所のお家で働かせてもらつて、お金をかせぐようになりました。みんなが丈夫の時はよかつたが子どもが病気になる困りました。そんな

な時いつも来て助けてくれるのは川向この茂八もはちさんでした。茂八さんは、薬草という薬になる草のことをよく知っている人です。病気を見ては、この草をせんじて飲めばと教えてくれ、または自分でせんじて飲ませてくれました。おかげで子どもたちは元気に育つていきました。

ある秋の夜の事、茂八さんが来ました。「子どもの病気はどうかね。」という親切な言葉、ミチさんはとてもありがたく思いました。それから茂八さんは「用事が出来て急に京都へ行く事になった。今晚でお別れだ、子どもを大事にしてね。それからこの本だが、病気になった時薬になる草のことが書いてあるからよく読んでごらん。また、私の持っているお金もいっしょにあげるから使つておくれ。」と薬草教典という本とお金をくれました。ミチさんはありがたくて、ありがたくて、一度に涙が流れ出しました。

その時です、雨戸のこわれるほど大きくたたく音がしました。「代官様のおふれだ。」と大声がします。「はい。」とミチさんが言ったが、これは茂八さんが危いんだ、茂八さんを裏口から逃がさなくてはと考えて逃がそうとした。それが遅かった。たたいた雨戸がこわれて外の人が飛び込んで来た。茂八さんはしばらく連れて行かれ、ミチさんは

今もらったお金をとられてしまいました。茂八さんのお金をとろうとした悪人のやった仕事だったそうです。

それからのミチさんはとても苦勞をしました。でも、子どもたちはすくすく育って、ミチさんを助け家中なかよくくらししました。ミチさんは暇を作っては薬草教典を読み、薬草を庭に植えて、病気の人には薬をせんじてあげ、困った人には親切をつくしました。年をとってからミチさんは皆から生きた神様、生きた仏様だといわれました。ミチさんが亡くなったとき植木山や中島の人たちで、ミチさんを忘れないようにと地藏様をつくりました。『道立地藏』です。頭の痛い時、おなかの痛い時、『道立地藏』にお願いすると、直ぐなおしてくれるそうです。



十六、道立地藏  
十七、相生の松

# 十七、あいおい相生の松

この名木相生の松は、樹高約十五メートル周  
囲約三・五メートル、樹齢約三百年を経る古木

でありました。別名夫婦  
松ともいって、古里東北  
部の山林中にありまし  
た。同所安藤源蔵さんの  
所有したもので、同氏の  
先祖源三郎が、今を去る  
三百年前、本家安藤文博  
家から分家の折、その記  
念として植樹されたもの  
と伝えられていま  
す。

雌、雄の松が太枝をは  
り合って抱擁する姿はま  
さに夫婦和合の象徴で、

すばらしい景観でありました。約三百年の樹齢を  
持つこの松も、昭和三十年秋頃枯死して伐採され、  
今はその雄姿を見ることが出来なくなっていました。



この『相生の松』は、戦前戦後を問わず古くから近郷近在はもちろん、遠く東京方面からもわざわざ訪れて、その奇をたたえるほどでした。それは松の木の不思議な伝説に、魅力を持たれて出かけたものでありましょう。

この『相生の松』は、前記のとおり源三郎さんが分家記念として、男松及び女松一对を植樹したものであります。

源三郎さん夫婦は近郷の評判が立つほど、夫婦仲がよく、昼は連れ立って野良へ出かけ夜は向かい合いで夜業にいそしみ、いつも二人が離れて仕事をするということはありませんでした。しかしどういいうわけか何年もの間子宝に恵まれません。二人は非常にこれを苦にして、何とか子宝を得る術すべはないものかと、日夜心配するのです。そして源三郎さんは、村の明神へ願かけをして、それから百日間、子

の刻参りを断行いたしました。大願成就後、ふしぎに妻はみごもり、その後、玉のような男の子を得ることができました。

この『相生の松』が、いわゆる二樹相接して一体となったのは、それから数十年後であったでしょうか、土地の人たちは「あの松は源三郎夫婦の化身だ。」と評判するようになり、特に子どもを持ってない人たちは、ぜひ『相生の松』の余徳よとくにあやかつて、子どもを授かりたいと考え、ひそかにこの松の葉や皮を煮出して飲む者さえいるようになりました。

今はこの名木がなくなりましたが、その頃の子の持てない夫婦の中には、この松の余徳にあやかつたものが大勢いたことでありましょう。

## 十八、落栗庵元空網らくりつあんもとのもくあみ

あな涼し浮世のあかをぬぎすてて

西へ行く身はもとのもくあみ

この辞世をのこして世を去った元空網は、本名金子喜三



郎と称して杉山に生れた人です。江戸に出て湯屋をいとなみ、大野屋喜三郎と称し狂歌に勉強いたしました。

その頃江戸で名声をはせていた大田蜀山人や宿屋飯盛らと交わり、喜三郎は後、元奎綱と改名して、狂歌の腕を挙げ一方の大家とまでいわれるほどになりました。

晩年は画を高崇谷を師として習い、画号を高崇松と称して一門の絵師でもありました。いま杉山葉師堂に残る『八方にらみの籠』は、町の指定文化財になっております。

元奎綱の業績については文献もあり伝記もいろいろ残っているようですが、次にその伝記の一、二を記してみます。

### (一)、川越発句会のこと

ある年、川越で発句会が催され、奎綱先生が江戸から来られるというので、地元の人たちはおおさわぎして会場で待ちかまえておりました。しかし、いくら待っても先生は見えません。ただある一人の見知らぬ俳諧師が来ていて、一人で勝ち続けていました。

夕刻になってこの人が、

この黙阿弥に掬いとられる

と詠んで、初めて先生であったことがわかり、それから「先生、先生。」と歓待されたということでもあります。

### (二)、ある剣道場を訪うた時のこと

ある道場で、門人が沢山集って剣術の稽古をしていました。そこへ黙阿弥がやって来て

汗水を流して習う剣術の

役にもたたぬ

と詠んで、門人たちから大変激怒されました。黙阿弥は、「まあまあ、下の句をつけるから待ちなさい。」と言って

御代ぞめでたし

と付けました。すると門人たちは、さかんにこの歌を詠み合いました。そして、「なるほど、これは偉いお方だ。」と皆感心してしまいました。

この道場主も大いに感激して客座に迎え、海山の珍味を整えてごち走したということです。

ある年、黙阿弥が長野の善光寺に旅したときのことです。その日は、たまたま仲秋の名月で地元の俳諧師たちが月見会を催すというので、先生もそれに参加することになりました。

その時、先生は、

善光寺で月見る今宵かな

と作られました。すると集った人たちが「これでは字が足らぬ。」と言って、盛んに批評し合っていました。

そこで、先生が、

よく光る寺で月見る今宵かな

と読めばよからう、と説明すると「なるほどおもしろい句だ。」と皆、感心したということです。

## 十九、古里の一夜堤・行灯堀の記

江戸時代の三大飢饉だいききんといわれた享保の大飢饉・天明の大飢饉・天保の大飢饉は、農作物の大不作を招き当時の人々は大変に困ったといひ伝えられています。

題名の一夜堤・行灯堀の由来もこの三大飢饉に連なるもので、旧古里村と旧板井村との長い水争いの結果が生んだ遺跡なのです。

この一夜堤・行灯堀のできた当時の文書類は、どこにも見当たりませんが、おそらく天保の大飢饉直後と推定され、

今より百五十年前頃の出来事であったことは、古老の言からも察知されます。

この古里北田耕地きただはその上方にほとんど用水地がなく、大雨期には洪水となり大かんばつには水不足を生ずる最悪の天水耕地のため、農民たちは血眼で水引に走りまわるありさまでありました。このため水争いは常に続き古里農民と板井農民との対立は、数十年にわたって眼にあまるものがありました。そして板井農民は水不足に困り、大挙して北



この冊子は、十数年前に嵐山町教育委員会が発行したものを、再版したものです。

当時の冊子は、原本が現在見つからず複写したものがありますが、何度も複写されたく、文字のかすれ等で、大変読みにくくなっております。そこで、より多くの方に読んでいただくと思い再版いたしました。

挿し絵については、製作者澤村厚夫様の御好意により、改訂三版より掲載いたしました。

再販にあたって、嵐山町教育委員会のご理解とご協力をいただき、本冊子の自由配布についても快く了解をいただきました。

本書のデザイン編集は、嵐山町博物誌編さん係にお願いいたしました。

本文につきましては、発行当時の内容をなるべく忠実に伝えるため、文字や文章の変更により内容等に変化を生じる可能性がある部分については原文のままにし、明らかな誤字及び慣例句等の訂正にとどめました。

語句のチェック及びPDFファイル化につきましては、実務教育出版 飯川 昇様にご協力をいただきました。

本冊子の点訳は、県立熊谷点字図書館 六点会溝江静子様並びに六点会会員の方々のご協力をいただきました。

点訳本は、嵐山町立図書館、嵐山おもちゃ図書館に配布予定です。

本冊子の制作に当たり、多くの皆様のご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

今後、本冊子の内容を、主に子供向けに要約し、別誌としての発行も考えております。

二〇〇〇年 三月

再 版 者

この冊子について  
奥付

# 嵐山町の伝説

(嵐山町教育委員会編)

挿絵 澤村 厚夫



再版 一九九八年六月二五日第一刷発行  
改訂 一九九九年五月一五日第一刷発行  
改訂 一九九九年十月一日第一刷発行  
改訂 二〇〇〇年三月十日第一刷発行  
再版及び発行者 佐藤 治

埼玉県比企郡嵐山町平澤二五四―一二

